

(七) 稲取・お舟石

稲取の志津摩の海岸には散歩のための道が続いていますが、この道を歩いていくと、海に大きな石が見えます。この大きな石は、「お舟石」といわれ、次のようなお話が伝わっています。

昔、稲取の入谷におじいさんとおばあさんが住んでいました。夏の初めのある日のこと、おじいさんとおばあさんは、気持ちよい海の波の音に誘われて、杖をつきながら志津摩川を海へと下っていきました。海岸に着いた二人は、目の前に広がるまっ青な海を眺め、気持ちのよい海からの風に着物の裾をなびかせながら海を見ていました。

やがて、二人はお弁当を食べようと思い、食べる場所を探し始めました。そして、波打ち際の大きな石の近くにある松の木の根元で食べることにした二人は、そこでお弁当を仲良く食べました。

まもなく、お弁当を食べ終えたおじいさんは、大きな石に近づく、ひよいと石の上に登りました。おばあさんはお弁当を食べながら、その様子をニコニコしながら眺めていました。

すると、おじいさんが大声で、「おばあさん、大変だ。わしの乗っているこの大石が陸のほうへ向かって動き出しているぞ。」と叫びました。おばあさんはびっくりして、あわてて石によじ登りました。

(これは、きっと海の神さまの仕業に違いない。) そう思った二人は、石の上に座って両手を合わせ、石が無事に止まるように祈りました。

しばらくすると、石が動かなくなったので、二人はほっと胸をなでおろし、石の上に座ったまま、あれやこれやと語り合いました。

そのうちに、おじいさんはおばあさんを石の上に残したまま、家に持ち帰る貝をとり始めました。おばあさんは、お弁当を食べた後

で眠^{ねむ}くなり、そのまま石の上で眠ってしまいました。おじいさんの腰のスカリが貝でいっぱいになったころ、「おじいさん、たすけてー。石が海にむかつて動き出したよー。」というおばあさんの叫び声が聞こえてきました。おじいさんは、大急ぎで走って戻り、石からおばあさんを助け下ろしました。そして、二人は「これは、海の神さまのお怒^{いか}りだ。」と海に向かって手を合わせ、海の神さまに一所懸命に祈りました。

このことがあってから、稲取の人々はこの石のことを、「男が乗れば陸に向かい、女が乗れば海に向かって走るお舟石だ。」というようになりました。

また、「お舟石」には、次のような話も伝わっています。昔、役小角^{えんのおづぬ}という行者^{ぎょうじや}が伊豆の大島に流されるといふ罰^{ばつ}を受けました。大島に流された小角は、夜になると大島を抜け出して、富士山などで修行^{しゆぎやう}をしたそうです。そのときにこの「お舟石」に乗って、大島から

海を渡って来たといわれています。また、小角は大島から「お舟石」に乗って稲取にやって来ると「お舟石」近くの洞窟^{どうくつ}に住んだともいわれています。役小角のお話はいろいろな所に伝わっていますが、この「お舟石」のお話のように伊豆には多くのお話が伝わっています。

